

学位請求論文要旨

ライプニッツと現象学

—モノドロロジーの脱・形而上学化による現象学的モノドロロジーの構想の試み—

大西光弘

本論文は、神学的・形而上学的体系として規定されるライプニッツの「モノドロロジー」を、現象学による「超越論的還元」及び「間主観的還元」をとおして「脱・形而上学化」し、現象学によって開示された「生活世界」における「我々の日常生活に生きて働いている、生きた哲学としてのモノドロロジー」を構想する試みである。

従来のモノドロロジーの神学的・形而上学的解釈によれば、神は宇宙を創造する前に、自らの無限の知性において、無限個の「可能世界」を考え、その可能世界のメンバー（＝個体・モノド）たちについて「完全概念」（＝完全個体概念）という規定を与えた。これはその個体に起こる無数の事柄を未来永劫まですべて書き込んだ概念であり、それによって個体（モノド）は、自分に起こる事柄の情報を外界から取り入れる必要はなく、そのすべては根底の「完全個体概念」から自動的に発現してくるゆえに、モノドには「情報を取り入れる窓」は必要なく、「無窓」とされるのである。

従って、モノドロロジーの脱・形而上学化を論証するためには、この「神学的形而上学」を背景にする「ライプニッツの認識理論」の成立について考察し、この認識理論の源泉とされる「プラトンのイデア論」から、「ライプニッツの記号の哲学」を経て、現在のコンピュータ文明が形成されるまでの認識理論の理論的展開を時代を追って確認する哲学的論証が前提にされなければならない。

このモノドロロジーの形而上学的解釈の徹底した認識論的批判による新たな解釈の可能性は、近年刊行された「ライプニッツ哲学と現象学」（『現象学とライプニッツ』2008）との対照考察をとおして開かれる。その対照考察においては、主要な4論文が批判的に解説され、その諸論文においては、フッサールの「超越論的還元」と発生的現象学の方法論による「間主観的還元」の真意が理解されないことから、「生活世界において生成している間主観性」という超越論的現象学の研究領域が開示され得ないことが明らかにされる。

この超越論的還元と間主観的還元を経た発生的現象学における志向分析を通して、生活世界において、自己意識が介在する「人間モノド」の生成以前に、受動的綜合によって「モノドに窓が開けられている」ことが解明され、それによって我々は、モノドの「微小表象による予定調和」という形而上学的・決定論的規定から解放され、生活世界を基盤にする間主観的モノドロロジーを展開する可能性が開かれるのである。こうして新たな「ライプニッツの知の改革」の方向が定まり、新たな「社会共同体のモノド論的目的論」の可能性が「ライプニッツの知の総合」の研究領域として獲得されうるのである。

以下、この論文全体の要旨を概括して論述する。

第一部の序章「カッシーラーのシンボルの哲学」では、第一章でのライプニッツの認識理論の論述のための準備的考察として、新カント派の立場に立つカッシーラーの著作『シンボル形式の哲学』で扱われる「シンボリック形成体」と、フッサール現象学の「意味的形成体」（志向的統一性）との類同性を際立たせ、シンボル現象の諸相を「シンボリック世界へのヘレン・ケラーの覚醒」「ユークリッド幾何学」「現象学におけるシンボル現象」「絵画作品におけるシンボル現象」などとして考察する。

第一章「ライプニッツの認識理論」では、ライプニッツの『認識、真理、観念についての省察』（1684）、『形而上学叙説』（1686）、及び『人間知性新論』（1765）を順に考察し、その認識理論の根本構造を明らかにする。その根本構造は、「世界の『表層における多様性』と『深層における統一性』との両立」（1704年に書かれたベルリン王妃ゾフィー・シャルロッテへの手紙を参照）である。その両立は、「表出」の概念によって、「一方が変化すると、一定の規則的關係を通じて、他方も変化する」という関係として、つまり $y=f(x)$ という「関数的対応関係」として表現される。この「一方の変化と他方の変化」が上層の「多様性」を意味し、「一定の規則的關係」が深層における「統一性」を意味するのである。つまり微視的次元を記述する「微分方程式」を解けば、巨視的次元を記述する法則が導出され、極微と極大の次元がこの微積によって連結されるゆえに、ライプニッツの認識世界は、関数的な「決定論」の支配する世界になるのである。

第二章「プラトンからライプニッツを経て人工知能へ」では、この「関数的対応関係」という認識構造が、プラトン「国家」を源泉として、デカルト「省察」、ライプニッツ「モノドロジー」、ヒルベルト「幾何学基礎論」、ラッセル「数学の諸原理」、ブラウワー「数学の基礎について」、ゲーデル「不完全性定理」、チューリング「計算可能な数について、その決定問題への応用」へと続く思想の流れの中で、いかに多大な影響を与えているかを、時代を追って概観する。この考察をとおして明らかにされるのは、「AIの守護聖人」と言われるほどの「記号知の代弁者」であるライプニッツ自身が、その記号知の「危うさ（盲目性）」を警告してもいることであり、このことは、フッサールによる「生活世界の数学化」に対する批判にも通じているのである。

第二部「ライプニッツと現象学」では、第一部第一章のライプニッツの認識理論の根本構造を踏まえて、モノドロジーの形而上学的規定について、現象学の観点からの認識論的批判を展開する。

序章「西田幾多郎によるモノドロジーの脱・形而上学化の試み」では、西田幾多郎が、本論文と同じ主題（モノドロジーの脱・形而上学化）をどのように試みたのかを考察する。

彼は、三層構造による場所の論理をとおして、モノドの理念的認識を超えた「行為的直観」を行う「具体的な身体的・歴史的行為者」としてモノドを解釈することによって、「モノドロジーの脱・形而上学化」を試みたのである。

第一章「ベルクソンのいう分析知と直観知」では、認識論上の異なる二つの立場、つまり、観察する「視点」を使い「記号」をも使う「分析知」と、事物の中へ直接入り込む知である「直観知」との違いについて考察する。

第二章「本質直観」では、このベルクソンの「分析知と直観知」の違いと、現象学の

「本質直観」における「直観」の意味とを対比的に考察する。

現象学における「直観」の概念は、「志向性 (Intentionalität)」の概念と不可分な関係にあり、特定の志向 (Intention) が充実される時に「直観される」と言われ、充実されない場合に「非直観的に与えられる」と言われる。また、志向は表象 (Vorstellung) とも表現され、志向の充実によって表象が直観される場合と、志向が充実されず空虚に留まる場合があり、後者が「空虚表象」と呼ばれる。この表象の概念は、無意識に非直観的に留まるライプニッツの「微小表象」と、同様に無意識に非直観的に留まる受動的志向性の空虚表象の充実による「受動的綜合」との対照考察において、重要な役割を果たすのである。

フッサールの「事物、身体、精神等の領域的存在の本質」を知的直観にもたらず「本質直観」は、「1 自由変更、2 受動的綜合による収斂、3 能動的綜合によるその確認」という3段階によって説明される。特に「2 受動的綜合による収斂」において、無意識に働く受動的綜合を通して「先述定的経験」として先構成されたものの重要性が強調されねばならない。

第三章「論文集『現象学とライプニッツ』について」では、論文集『現象学とライプニッツ』(2008)に所収の8本のうちの4論文が概説され、批判的考察にもたらされる。

第一の論文は、ハンス・ポーター「よく基礎づけられた現象——現象学としてのライプニッツのモナドロジー」である。これは、ライプニッツの「現象」概念を明解に説明した論文であり、ライプニッツのいう「実在する現象」が、「生活の全系列との合致

(consensus cum tata serie vitae) をなす現象を意味すると考え、これを「一つの生活世界の中へ埋め込まれたもの」と理解して、フッサールの「生活世界」と同一視しようとするものである。しかしこの解釈は、自然科学の対象の実在をそのまま認める、フッサールのいう「自然主義的態度」と、「超越論的還元」を経た「超越論的態度」とを混同し、「超越論的態度」において自然科学と精神科学の根底にあつて「前学問的経験世界」とされる生活世界の研究領域の独自性を見失っていると批判されなければならない。

第二の論文は、クラウス・ケーラー「意識とその現象——ライプニッツ、カント、フッサール」である。ここでは、ライプニッツとカントとフッサールにおける「意識と現象」の把握のされ方が問われる。その際、意識概念は「反省意識」としての「統覚」として理解される。この統覚は、ライプニッツの場合は「経験的統覚」と規定され、カントの場合は「超越論的統覚」と規定される。そして、カントにおいては「超越論的転回」を通して「フッサールの現象学的基礎洞察…の方法論的な出発点はすでに根本的に到達されている」(同書 20 頁)、と解釈されている。しかしこの解釈は、フッサールが、カントの「超越論的統覚」と「物自体」という概念を「形而上学的残余」として認識論的に退けていること(フッサール『危機』書、203 頁)をも、また生活世界における「先述定的明証に基づく先述定的経験」(フッサール『経験と判断』§6)という新たな経験領域を開示する独自の「超越論的現象学」を発展させていることをも、見落としているのである。

第三の論文は、酒井潔「自らを示すことの現象学への道——ハイデガーとライプニッツの現象概念——」である。ここでは、表象の概念が「顕在的な表象」とその「顕在的表象」に伴う「周遍的表象」、そしてさらに「潜在的で人に気づかれない表象」(＝自らを示さない)表象、すなわち「深層の表象」とに区別される。この「周遍的表象」は、ハイ

デガールの「世界内存在」における「世界」の概念やフッサールの「地平」の概念に相応し、「深層の表象」はライブニッツの「微小表象」とみなされることで、「微小表象という概念は…フッサールの…地平の機能を含んでいる」（同書 121 頁）と解釈される。

他方、酒井は、別著において「微小表象」と「自我」との関係について、「極微知覚 [=微小表象] は…、潜在的な自我がいわば『原自我』として先-存在し、顕在化しうるために待機すること（イドリング）を可能ならしめる」（酒井潔『ライブニッツのモナド論とその射程』83-5 頁）とすることで、「微小表象」を「原自我」と結びつける解釈を提起している。このことによって酒井は、微小表象は「全く自我が関与せずに作動している受動的綜合」とは相応し得ない、という結論に導かれることになるのである。

第四の論文は、レナート・クリスティン「モナドロロジー的現象学——新しいパラダイムへの道——」である。ここでクリスティンは、「モナドロロジーは現象学を先取りした」（同書 155 頁）と言えるがそれは「ライブニッツが、表出的力の理論によって、意識の志向性の概念を先取りした」（同頁）からだ、と考える。さらに彼は、モナドロロジーを現象学的に解釈すると「モナドの無窓性が和らげられる」（同書 158 頁）とも言う。つまり、モナドが形而上学的に行う「客観的自然の規定」を、現象学的な「構成的な意味付与」まで引き戻し、この意味付与を「単数の純粹自我が行うのではなく、複数のモナド的自我が共同で行っていること」（同頁）に注目すれば、「ノエシスの間主観性」が「モナドの無窓性」を和らげる、と彼は主張するのである。しかし、この間主観性の解釈に基づく彼の「新しいパラダイム」の提起に対しては、フッサールにとって「モナドの窓」は「複数のモナド的自我」が前提されている能動的綜合による「ノエシス—ノエマの相関関係」では根拠づけられ得ず、「徹底して先自我的に作動する受動的綜合」の段階（次元）でしか根拠づけられ得ない、という批判がなされなければならない。

第四章「ライブニッツ哲学と受動的綜合」では、第三章の批判的考察の成果を踏まえ、いわゆる「モナドの無窓性」の議論を巡り、フッサールの発生的現象学において開示された受動的綜合をとおして「モナドに窓が開かれていること」が解明される。

発生的現象学においては、「自我モナド」そのものの発生が問われ、「自我意識の形成以前」に、母子間の快・不快をめぐる本能志向性の充実・不充実による「情動的コミュニケーション」において、すでに「モナドの窓が開かれている」ことが、フッサールの『デカルト的省察』『受動的綜合の分析』『間主観性の現象学』などの引用により、論述され、論証される。

第五章「発生的現象学の方法論」では、これまで議論の前提にされていたフッサール現象学の静態的現象学から発生的現象学への新たな展開について、発生的現象学の方法論の観点から、その展開の必然性が三つの論点を通して改めて明確に呈示される。

その第一の論点は、「超越論的独我論」の克服にあたって発生的現象学の果たした役割である。『イデー』期には、「純粹自我」が「他我」をも構成するという「超越論的独我論」に陥らざるを得ないことが明らかにされ、それを克服するために、自我モナドの発展以前の動物や幼児のモナド等への段階を包含するライブニッツの「モナドロロジー」へと関心が向けられ、「間主観性の構成」が問われたのである。

第二の論点は、同じく『イデー』期に背景に退いていたフッサールの「時間論」の展

開と発生的現象学との関わりである。母子間の本能志向性の充実においては「過去把持-今-未来予持」による「生き生きした現在」の「留まりと流れ」が共に体験されることが、ここで論証されたのである。

第三の論点は、発生的現象学の方法として「脱構築 (Abbau)」の方法が次第に明確になったことである。この脱構築は、特定の高次の構成層を働いていないとして、構成層の全体から「カッコ入れ」によって取り除くことによって、その構成層が働きうるために潜在的に働いていなければならない、より低層の構成層の発見の方法を意味するのである。

第三部の第一章「ライプニッツの知の『改革』」では、モナドの「形而上学的」な「観念論的」解釈を、『経験と判断』における「経験」の概念に即した日常生活（フッサールのいう「生活世界」）の次元へ引き戻す「改革」が呈示された。その際、主要な問題とされたのは、「生活世界の次元へ引き戻されたモナドロジー」において、生活世界における「動物モナド」や「幼児のモナド」の段階から「自我モナド」への「モナドの階層的発展」はどのように理解されるのか、という問題である。

このモナドの階層的発展は、発展の目的を問う「目的論」の観点から考察される。ライプニッツの場合はこれは、「微小表象による予定調和」によって規定された決定論的「モナドロジーの目的論」として理解されるのに対して、フッサールの場合は、「理性衝動」による「理性の実現」という「モナド論的目的論」として理解されている。この相違は、アリストテレスの「エンテレケイア」の概念の解釈の相違に由来しており、ライプニッツにおいては「すでに到達された完成態」が強調され、フッサールにおいては「内在的な形成原理」による「形成のプロセス」としてのエンテレケイアが強調されているのである。

また、このモナドの階層的発展は、M. ポランニーによる「創発」の概念によって三つの観点から解明された。第一に、創発を「物理的メカニズム」として解釈する試みとその限界が明らかにされ、第二に、「数学的対象」を「創発における下位と上位の階層関係」として解釈する試みが増えられ、さらに第三に、創発が「暗黙知の働きとしての内在化 (indwelling)」つまりフッサールの「感情移入」との関連において考察され、ポランニーにおいては受動的綜合による「受動的感情移入」が見落とされていることが指摘されたのである。

この創発によるモナドの階層的発展の考察を踏まえて、改めてモナドロジーの原点である「表象と欲求」の概念に立ち戻り、モナドの形而上学的解釈では考察されえないであろうモナドの「失敗の経験」が、若き政治家としてのライプニッツを例にして考察された。

第二章「ライプニッツの知の『総合』」では、「生活世界へ引き戻されたモナドロジーが目指す知」と「現代社会で求められる知」との「総合」の指針が考察された。

まず第一に、生活世界における「情動的コミュニケーション」を土台とする「言語的コミュニケーション」によって、間主観的世界が構成されることが示された。そして「階層的な発展におけるモナドロジー」において、「人間よりも高階のモナド的なもの」つまり「人間たちの集合体に宿る上位のエンテレケイア」の例として、「法人」という社会共同体の構成の可能性が考察された。これは、人間たちの集合体にいわば「人格的な意識体が宿っている」と考え得るものであり、本論文のいう高階の「モナド的なもの (エンテレケ

イア)」とは、こういうものを言うのである。そしてそういう社会共同体の一事例として EU 共同体を取り上げ、その社会共同体の実現と運用にあたっての必須の条件を考察した。それは、EU 諸国の様々に異なった生活世界をなす言語・文化・伝統に由来して潜在的に働く無意識的な相対的傾向性を顕在化する、という課題である。その際、潜在的志向性の顕在化に寄与しうるのが、まさに発生的現象学の発生的志向分析に他ならない。この文化的相対性の顕在化をとおして初めて、言語的コミュニケーションにおける相互理解が可能になるのである。さらに発生的現象学において、発生的志向分析と、人間の系統発生や個体発生に関する脳発達学や発達心理学等の知見とが統合されることによって、「知の総合」の研究方向が確立され得るのである。

以上をもって、神学的・形而上学的体系と規定されるライプニッツの「モノドロジー」を、現象学による「超越論的還元」及び「間主観的還元」をとおして「脱・形而上学化」し、「生活世界において生きて働く哲学としてのモノドロジー」を構想する、という本論文の課題の概略的論述とする。

=====

目次

ライプニッツと現象学

――モノドロジーの脱・形而上学化による現象学的モノドロジーの構想の試み――

第一部 ライプニッツと西洋知

序章 カッシーラーのシンボルの哲学

第一章 ライプニッツの認識理論

第二章 プラトンからライプニッツを経て人工知能へ

第二部 ライプニッツと現象学

(モノドロジーの脱・形而上学化)

序章 西田幾多郎によるモノドロジーの脱・形而上学化の試み

第一章 ベルクソンのいう「分析知と直観知」

第二章 本質直観

第三章 論文集『現象学とライプニッツ』について

第四章 ライプニッツ哲学と受動的綜合

第五章 発生的現象学の方法論

第三部 ライプニッツの知の改革と総合

(モノドロジーの間主観化)

第一章 ライプニッツの知の「改革」

――モノドを形而上学的次元から生活世界の次元へ引き戻す――

第二章 ライプニッツの知の「総合」